

# 越前国東郷槇山城の歴史と構造

新谷 和之

## はじめに

東郷槇山城（福井県福井市安原町・小路町・枋泉町）は、戦国大名朝倉氏の支城として築かれ、豊臣期には越前国支配の拠点の一つとなった。城跡の最高所には、豊臣期に城主をつとめた長谷川秀一を顕彰する石碑が建ち、一般的には長谷川秀一の城として知られている。後に詳述するように、公園や道路の整備に伴い遺構の一部が破壊されているが、全体的な曲輪配置は往時の様相をとどめている。こうした越前地域史における重要性和遺構の残存状況を踏まえて、当城跡は福井市の史跡に指定されている。

だが、当城がいつ誰によって築かれ、どのように機能したかを示す確実な史料はなく、その歴史については近世の地誌に依拠するところが多い。地誌の叙述に厳密な史料批判を要することはいうまでもない。筆者はかつて、東大味館（福井市東大味町）の空間構造の復元を試みた際、地誌の叙述の変化に着目し、明智光秀の由緒が天台真盛宗の布教の過程で後世に付与された可能性を指摘した（新谷 二〇二〇）。当城についても、地誌の叙述を相対化する視座が求められよう。

当城については、中心域に石垣が一部残存し、笏谷石製の瓦が散布していることから、長谷川氏によって改修されたことが早くから指摘されていた（岩田 一九八〇・福井市 一九九〇）。佐伯哲也は、石垣の残存箇所を自身の縄張図にプロットし、改修の範囲をさらに厳密に想定した（佐伯 二〇二〇・二〇二一）。この佐伯の図が、現在公表されているなかでは最も精密な縄張図といえ

る。一方、福井県立一乗谷朝倉氏遺跡博物館は一乗谷とその周辺の赤色立体地図を作成し、当城の地形環境も詳細に把握できるようになった。石川美咲は、佐伯が捕捉できていなかった遺構を赤色立体地図から見出し、改修の経緯についても考察を深めている（石川 二〇二二）。この最新の測量成果を縄張図に反映させることで、遺構の分布をより正確に把握することができると考える。

以上の点を勘案して、本稿では、東郷槇山城の歴史と構造を再検討し、越前国内で当城が果たした役割について論じることにした。一では、創建以来の歴史を関連する史料から紐解き、先行研究における当城の評価に検証を加える。二では、主として現地踏査に基づき遺構の分布を把握し、構築年代や改修の実態を探る。これらの分析を通じて、当城の歴史的な位置づけを明確にするとともに、近世以降の伝承の背景を越前の地域史のなかで考察する。

## 一 築城と改変の経緯

本章では、東郷槇山城に関する基本的な史実を確認し、主に文献史学の立場から当城の再評価を試みる。その際、次の二点に留意したい。

一つは、地誌の叙述を年代順に整理し、その移り変わりを把握することである。一般的に、地誌の叙述は編纂時期が下るほど詳細になる傾向がある。これは、先行する地誌の叙述に新たな情報が付加されていくためである。越前地域の城郭史では、「越前国古城跡并館屋鋪蹟」（杉原・松原編 一九七二）が最も体系的な地誌として重視されているが（福井県教育委員会 一九八七など）、

地誌相互の比較検討は十分になされていない。叙述の移り変わりをもとに、各時代の城郭に対する認識を把握することで、一定の史料批判が可能になるものと考ええる。

もう一つは、廃城後の城跡の改変に関する歴史を把握することである。城跡は、地域のアイデンティティを象徴する遺跡として重要視され、城主や合戦に関する伝承を伴う事例が少なくない。そこには一見して荒唐無稽な語りも含まれるが、虚実綯い交ぜの様々な伝承が創出されること自体が、城跡という場の性格を物語っているといえよう。また、城山は多くの場合、集落からそれほど離れていないことから、山林用益の場としても活用された。こうした歴史の重層性の意義については、前稿で指摘した（新谷 二〇一九）。

東郷槇山城については、近代以降の公園整備等に伴う改変により、旧状が判然としない箇所が見受けられる。それゆえ、改変がいつどのように行われたのかを把握することで、本来の縄張をある程度想定することが可能になると思われる。このことは、次章での遺構の分析にも援用できるだろう。

## 1 戦国・織豊期の東郷

朝倉氏と東郷地域との関わりは、一四世紀には既にみられる。松原信之によると、朝倉高景は貞治五年（一三六六）に東郷荘の地頭職を獲得した。その後、朝倉氏景の子正景が東郷荘に土着し、東郷と称する。東郷の朝倉一族は、一条家領東郷荘の代官をつとめた（『桃花蕊葉』『続群書類集』四七一）。だが、応仁・文明の乱（一四六七～七七）以降、朝倉孝景の押領が深刻化し、東郷は朝倉氏の実質的な支配下に置かれた（松原 二〇〇八）。

東郷槇山城の創建時期や城主を示す史料は確認できないが、上述の経緯を踏まえると、朝倉方の城として築かれた可能性は高いといえよう。

東郷槇山城の存在が再びクローズアップされるのは、豊臣期のことである。天正一三年（一五八五）閏八月、羽柴秀吉は、畿内の中枢部を自身や一門が掌握し、直臣と服属大名を同心円状に配置する形で大規模な国替を実施した。ここでは、ほとんどの豊臣大名が国替を強制されるとともに、国替に伴う百姓の移動が禁止された。こうした近世的知行制の導入により、畿内を中心とする集権国家が誕生したと藤田達生は評価している（藤田 二〇二二）。

この時、若狭へ転封された丹羽長重に代わって堀秀政が北庄城（福井市）に入部した。同時に、長谷川秀一が東郷、木村常陸介が府中（越前市）に入り、堀とともに越前を分有した。長谷川の所領について、藤井譲治は足羽郡・今立郡・大野郡に広がっていたと推定する（藤井 一九九四）。松原信之は、堀秀政の所領域を勘案した上で、足羽川南側の足羽郡と日野側東側から今北東郡一帯に所領を想定し、具体的な範囲を地図上にプロットした（松原 二〇一二）。いずれにせよ、東郷槇山城は想定される長谷川領内では北寄りに位置し、北庄城とも一〇キロほどしか離れていない。北庄と府中が前代の政治拠点と踏襲しているのに対して、東郷は郡レベルの政庁としては実質的に新規の取り立てである。それにも関わらず、領内の中央に居城を置かなかつたのは、東郷が経済的に卓越した位置にあつたためだろう。小島道裕は、戦国期に東郷が美濃街道と越前街道の交差する交通の要衝にあり、市場が開かれたと推定している（小島 二〇〇五）。石川美咲は、この小島の指摘を受け、東郷が一乗谷や三国湊と並ぶ町場であると織田信長とその家臣らに認識されていたことを紹介している（石川 二〇二二）。

長谷川秀一は天正二〇年六月に朝鮮へ渡海し、石田三成ら奉行衆を軍事的に補強する役割を果たした（谷 二〇二二）。文禄二年五月、秀一は渡海先の朝鮮で亡くなる（永昌寺位牌）。秀一の息子が成人するまでは秀一の父嘉竹が代

理をつとめる案が浮上するが、結局は秀一の弟「ヤカラノ助」(権助秀康)が跡目を継ぐこととなる(谷 二〇一七)。秀康は家督相続に伴い侍従に任官され、「東郷侍従」と呼ばれた。秀康は慶長三年(一五九八)二月に亡くなるが、長谷川氏の領地はその後も維持された(黒田 二〇一六)。谷徹也は、黒田基樹が出自不明とした秀弘(羽柴長吉)を秀一の息子に比定し、秀康の死の前日に秀弘が侍従に任官されたことを指摘している(谷 二〇一七)。

東郷の領主は、長谷川氏から丹羽長正へと交代したとされている。丹羽長正は慶長五年の関ヶ原の戦いで西軍につき、改易となった。「廃絶録」上(『改定史籍集覧』十一)は、長正の所領を越前藤枝五万石としている。藤井譲治は、長正が藤枝から東郷に転封されたと指摘し(藤井 一九九四)、以後の研究でもこの見解が踏襲されている(石川 二〇二二など)。だが、前述した長谷川氏の家督継承の経緯を踏まえると、東郷と藤枝は別物で、長谷川が東郷を継承し続けたとみる余地もある。いずれにせよ、同年末、結城秀康が越前国六万石を拝領し、東郷領は解体され、東郷榎山城もその役割を終えたものと考えられる。

廃城後、東郷には福井藩の御立山(直轄林)が設定され、藩主らが松茸狩りなどに赴いた。東郷御立山は、管理の一端を担う「守り村」の分布から、概ね一乗谷の西向いの山々に比定できる(新谷 二〇一九)。当城跡も、御立山に含まれていた可能性が高い。そのため、近世には山内での利益は一定程度規制されたものと思われる。

## 2 地誌の叙述の移り変わり

東郷榎山城の記載は、貞享二年(一六八五)の「越前地理指南」(杉原・松原編 一九七二)にみられる。すなわち、東郷町の項に「南に長谷川藤五郎城

山の跡あり 西に養父可竹屋鋪跡あり」と記載されており、長谷川秀一の居城と認識されていたことがわかる。「可竹」は秀一の父嘉竹のことであり、その屋敷跡が伝承されている点も興味深い。

享保五年(一七二〇)の「越前国古城跡并館屋鋪蹟」(杉原・松原編 一九七二)では、さらに記述が詳細になる。やはり長谷川秀一の城とした上で、「城台」(東西二間・南北一九間ばかり)、「二之丸」(七間四方ばかり)、「千畳敷跡」(東西二八間・南北二〇間ばかり)、「屋形跡」(東西二二間・南北九間ばかり)と曲輪の名称や規模を具体的に記している。「城台」と「二之丸」の間には「石階」(石段か)があるとし、具体的な施設の存在にも言及している。ここから、同書が現地の踏査に基づいて叙述されたことがうかがえる。「越前国名勝誌」など後年の地誌も、この叙述を概ね踏襲している。

寛保三年(一七四三)の「越前拾遺録」(杉原・松原編 一九七二)は、前出の「城台」を本丸とするが、他の曲輪名や曲輪の規模は「越前国古城跡并館屋鋪蹟」と同じである。土居(土塁)や堀切への言及は、オリジナルな指摘として注目される。

本書で特筆すべきなのは、城名を「東郷牧之山城」とする点である。先行する地誌類は城山や秀一の城とするのみで、具体的な城名を記載していなかった。周知の「東郷榎山城」の呼称は、本書にルーツを求めることができよう。一般に知られる榎山の名からは、榎が多く生えている山を連想しがちだが、牧(放牧地)が語源だとすると、そのイメージは当たらないことになる。

本書は従来の地誌類に比べて、歴史の叙述が詳細である。「朝倉家の家臣代々住し、天正十三年長谷川藤五郎秀一城郭修造し、子息弥柄介まで在城なり。寛永年中破却せらる」とあり、朝倉氏段階の叙述がみられる点は注目される。「弥柄介」は、秀一の跡目を継いだ秀康であり、長谷川家の家督継承にも



言及している。恐らく、編者は長谷川氏の菩提寺である永昌寺の位牌や過去帳などの情報を把握していたのだろう。

昭和一八年（一九四三）に足羽郡教育会が発行した『福井県足羽郡誌 後編』（郡誌）は、「越藩拾遺録」をベースにしつつ、さらに詳細な情報を加えている。これによると、朝倉氏は文明三年（一四七二）、一乗谷に本城を築き、西部の連峰に支砦を設け、東郷槇山城とした。その後、鳥居景近・虎牧路次などが相次いで当地に居住したとする。朝倉段階の叙述は「越藩拾遺録」にもあったが、ここでは一乗谷城の支城として明確に位置づけられているとともに、在城した家臣の名前も記されている。ただし、一乗谷の朝倉氏の城は一五世紀前半には既にみられることが、その後の研究で明らかにされている（松原一九七八）。なお、東郷五ヶ（ヤシ原・東郷・小路・札町・福田）は朝倉氏の時期には市街地化していたとしており、城下への言及がある点で地域史の分析が深化していると評価できる。

豊臣期に関しては、羽柴秀吉が天正一二年八月、長谷川秀一に当地を与えたこと、秀一が朝鮮出兵時に病没し、丹羽長正が東郷に入部したこと、長正が関ヶ原の戦いで西軍に与して改易され、槇山城も廃城となったことが記されている。だが、秀一が東郷を拝領したのは天正一三年閏八月である。また、秀一の死後に弥柄介が家督を継いだことが「越藩拾遺録」では触れられているが、本書では看過されている。長谷川氏の歴史が遠い過去のものとなり、込み入った家督継承の経緯が理解できなくなっていたものと思われる。

その後の城郭研究では、むしろこの郡誌の叙述が踏襲されていくことになる。たとえば、『日本城郭大系 第一巻』（大系）は、秀一の東郷入封を天正一二年とし、秀一没後に東郷は丹羽氏の所領に戻ったとしている（岩田 一九八〇）。『福井市史 資料編1』はほぼ体系の叙述の引き写しであり（福井市

一九九〇）、郡誌の誤謬が郷土史の分野で定着していった。秀一死後の家督継承に本格的なメスが入るのは、藤井譲治の研究（藤井 一九九四）以降のことである。

### 3 大正期における石碑の造立

東郷槇山城跡の中枢部は、公園等の整備により改変を受けている。こうした開発の端緒となったのが、石碑の造立である。現在、城の主郭跡には長谷川秀一の顕彰碑（写真1）と忠魂碑（写真2）が建っている。秀一の碑は大正三年（一九一四）年、忠魂碑は大正二年一〇月にそれぞれ建立されたことが揮毫からわかる。

当城跡に忠魂碑を建立したのは、東郷の在郷軍人会である。郡誌によると、東郷の在郷軍人会は、日露戦争を契機として当時の渡辺村長により組織され、明治四〇年（一九〇七）一〇月六日に東郷小学校で発会式が開かれた。明治四四年五月五日には、帝国在郷軍人会東郷村分会と改称している。そして、大正三年三月には東郷槇山城跡に戦病死者の忠魂碑を建てて英霊を祀ったとある。揮毫の年月とのズレは、石碑の造営と設置のタイムラグであろうか。

秀一の碑が設置



写真1 長谷川秀一の顕彰碑

された経緯ははっきりしないが、忠魂碑と一連の整備であることは間違いない。城跡や古戦場が郷土のシンボルとして親しまれ、戦間期のナショナリズムの高揚に伴い、記念碑や植栽の整備が施されていったことは周知の通りである（高木 一九九・羽賀 一九九八など）。東郷においても、戦没者の追悼という現実社会の問題と並行して歴史の顕彰がなされていることがうかがえ、興味深い。

この大正期の城跡整備に先立って、足羽山公園（福井市）の整備が進められていたことは注目される。足羽山は福井市街の南西に位置し、近世には福井城下の寺町が周囲に設定され、愛宕山の名で親しまれた。明治期に入ると招魂社や藤島神社が建立され、越前出身の継体天皇像や様々な記念碑が建ち、郷土の精神的統合や帝国の祝祭の舞台として位置づけられていく（市川 一九九）。明治四二年、皇太子の北陸巡幸に合わせて公園の整備が行われ、現在の公園の原型がつくられた。設計をつとめた長岡安平は東京都の技官で、全国の城跡等の公園整備に携わったことが知られている（野中 二〇一五など）。その後、公園利用の活性化に向けて、車道の開削が議会で議論された。大正二年四月から九月にかけて、孝顕寺谷側からの車道の工事が行われた。昭和八年（一九三三）にも陸軍の大演習を挙行するため、車道の拡張がなされている（福井市

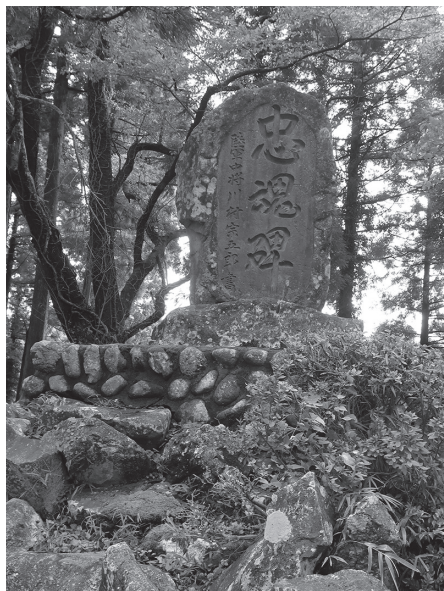


写真2 忠魂碑

二〇〇四）。  
 このように、足羽山公園の整備は、単なる遊興の場の創出にとどまらず、政治色を強く帯びたものであった。これは日露戦争後のナショナリズムの高揚と呼応しており、東郷での記念碑の整備と通じるところがある。特に、足羽山での車道の整備が、忠魂碑や秀一碑の設置の前年であることから、東郷の人々が足羽山での事業に感化されて石碑の造立に踏み切った可能性が考えられる。なお、足羽郡の在郷軍人会は明治三二年二月に発足しているが、発会式が行われたのは足羽山である（郡誌）。石碑を設置した東郷の在郷軍人も、足羽山を象徴的な場と捉えていたことだろう。

こうした公園整備は、城郭遺構の破壊を少なからず伴うものだったとみられる。秀一碑の基礎部分は石で固められており、破碎された笏谷石製の石仏もみられる（写真3）。大正期に石仏を基礎石としてわざわざもつてくるとは考えにくい。ため、もともと城跡にあつたものを転用したのだろう。また、石仏の破碎は当時の価値観にはそぐわず、石碑の設置前であることは確実である。破碎された石仏が城跡にある理由の一つとして、石垣石材への転用が考えられる。石仏などのいびつな形状のものは、築石にはあまり適さないが、裏込め石として用いられ



写真3 秀一碑の基礎



るケースは、東郷槇山城と同時期の城郭でも確認されている（北野 二〇二二など）。廃城時の破却（破城）に加えて、近代以降の公園整備も遺構改変の要因として考慮する必要がある。

さらに、石碑の存在は、城主が長谷川秀一であることを後代に至るまで強く印象づけることになった。秀一の入部以前には朝倉氏の支城としての歴史があり、秀一死後の家督継承についても近世の地誌などで言及されている。石碑の造立は、こうした長い歴史のなかで秀一の実績のみを切り出す行為といえよう。近代における藩祖顕彰を念頭に置けば（高木 一九九九など）、実名と実績が明らかな秀一以外は汲み取るべき歴史とみなされなかったのだろう。このような歴史の取捨選択が、近代にナショナルリズムの高揚のなかで行われたことは先述した。だが、現代においても観光利活用の文脈で同様の現象が起きがちであることは留意すべきである。

## 二 各曲輪の現状と評価

本章では、東郷槇山城の構造を縄張研究の手法をもとに把握し、曲輪や防御施設の特徴や配置の意図などを探ることにしたい。

### 1 東郷槇山城の立地

東郷槇山城は、一乗谷の西を画する山地より北西に派生する尾根筋の先端部に位置する（図1）。標高は、最も高いところで約一二メートルを測る。比高は一〇〇メートルほどとそれほど高くないが、現福井市街への眺望は抜群によい。朝倉氏の本城である一乗谷城は、当城より約三・六キロ南東に位置し、比高は四〇〇メートルを超える。一乗谷城も眺望は良好だが、谷を見下ろす高所に位置するため、平野部へのアクセスはそれほどよくない。そのため、東郷

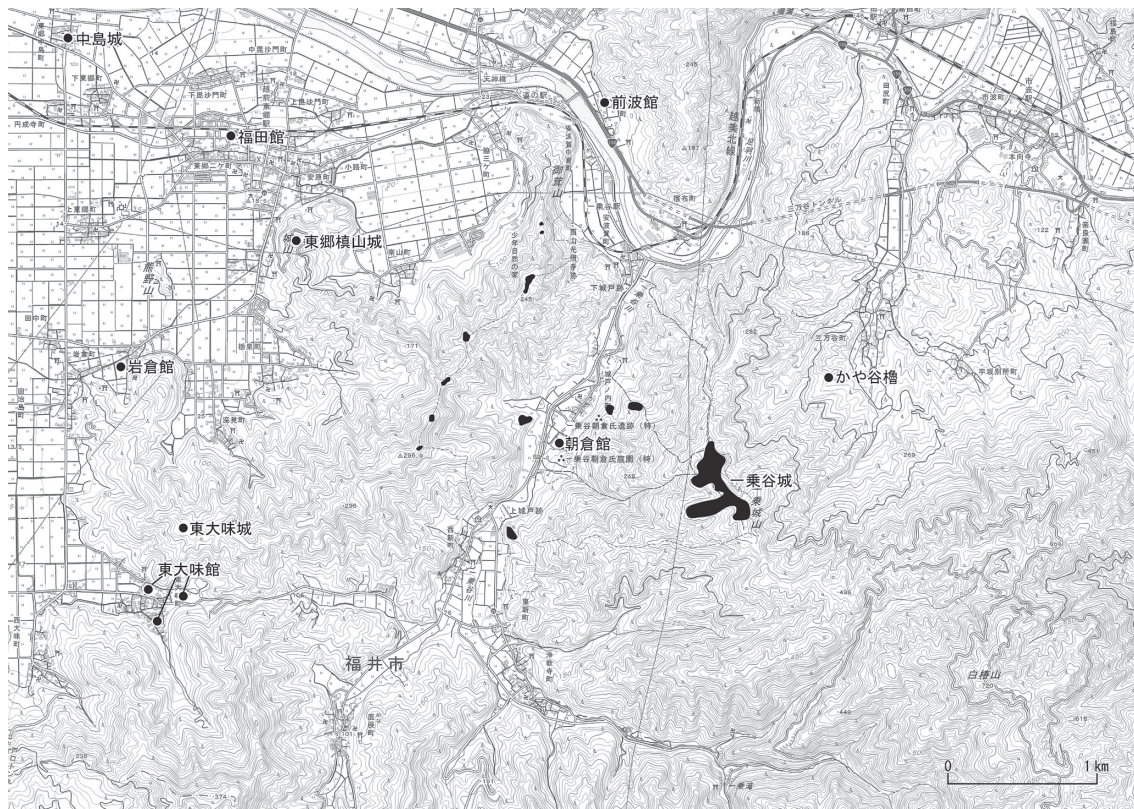


図1 東郷槇山城と周辺の城館（国土地理院2万5千分1地形図に加筆。図中の黒塗は一乗谷城の遺構）

横山城は、朝倉氏の時代には一乗谷の閉鎖性を補完する役割を果たしたと考えられる。

一乗谷には、朝倉氏の滅亡後も暫定的に政庁が置かれるが、織豊政権の拠点としての機能は北庄城に移行する。一方、東郷横山城は長谷川秀一の居城となり、豊臣政権による越前支配の一角を占めることとなった。東郷横山城が拠点に取り立てられた理由としては、先述した立地のよさや東郷の都市的な発展（小島 二〇〇五）を挙げることができよう。

## 2 縄張の分析

当城跡の地形については、福井県立一乗谷朝倉氏遺跡博物館が作成した赤色立体地図が最も精密に捉えている。そこで、これをベースに現地踏査を実施し、新たに縄張図を作成した（図2）。ベースマップは、昭和三五年に作成された福井県基本図（福井県立一乗谷朝倉氏遺跡博物館提供）である。縄張図のベースマップには、市町村等が発行する都市計画図（縮尺が二五〇〇分程度）を用いるのが一般的だが、測量の精度は当然赤色立体地図に及ばない。福井市は都市計画図をホームページで公開しているが（<https://www.city.fukui.lg.jp/sisei/keikaku/keikaku/p012271.html>）、これと赤色立体地図を対照させたところ、齟齬が大きいことが判明した。そこで、やや変則的ではあるが、比較的ズレが少なかった前掲の地図を用いることとした。

城の遺構は東西約三八〇メートル、南北約五六〇メートルに及び、越前の山城では大規模な部類に属する。図1の範囲では、一乗谷城に次いで規模の大きい城である。

最高所の曲輪Ⅰは、地誌にいう「城台」に比定されている。長谷川秀一碑や忠魂碑が建ち、園路等が敷設されており、遺構が大きく損なわれている。切岸

面には所々に石垣の石材が残存しており、かつては石垣が全周していた可能性が高い。曲輪Ⅰの南下の曲輪の東面には、石垣が面を保った状態で残存しており（写真4）、当城における石垣の構築技法がうかがえる。荒割石の野面積みで、矢穴は確認できない。

曲輪Ⅰでは、過去に笏谷石製の瓦が採取されている。石瓦は、寒冷で積雪の多い越前の気候風土に対応した屋根葺きであるといわれているが、織豊期に石瓦を軒にまで葺いたのは北庄城と当城のみである（佐伯 二〇二〇）。このことは、越前国内での当城の卓越性を物語っている。

Ⅱは舗装されて駐車スペースとなり、旧状を留めないが、かつては曲輪であった可能性が高い。大系はこれを地誌の「二之丸」に比定している（岩田 一九八〇）。「城台」と「二之丸」の間には「石階」があったという。曲輪ⅠとⅡを結ぶ現在の階段は曲輪を破壊しており、後世の造作であることは明らかだが、先行する石段が存在し、近世にはまだみることができたのかもしれない。

曲輪Ⅲは、地誌の「千畳敷」に相当すると考えられている。その名の通り、城内では最も広い曲輪である。ここも公園の整備が入り、少なからず改変を受けているとみられる。南辺の土塁（写真5）は、曲輪の造成に伴う削り残しの



写真4 曲輪Ⅰ南下の石垣



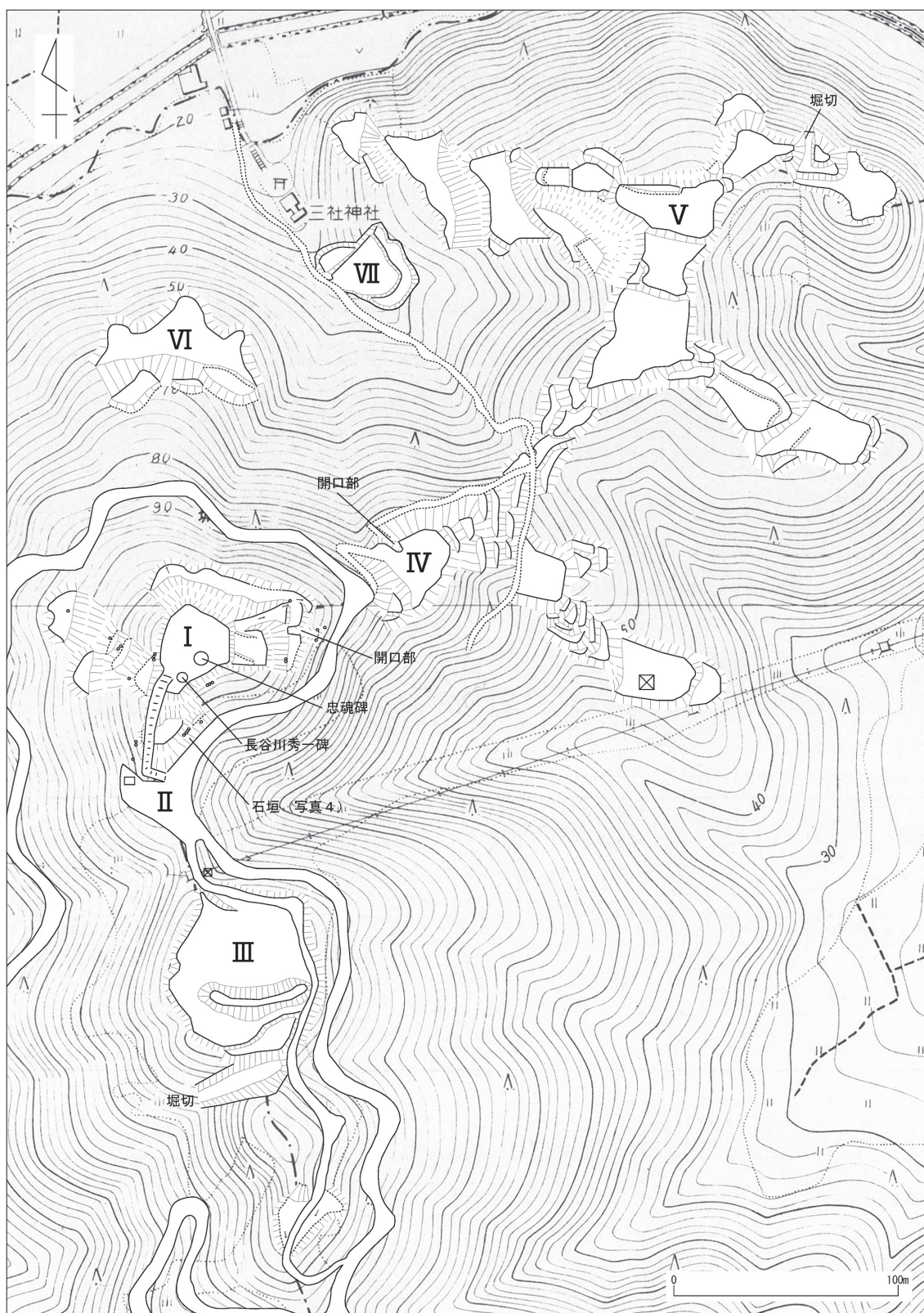


図2 東郷槇山城縄張図 (作図：新谷和之)  
ベースマップは昭和35年の福井県基本図 (福井県立一乗谷朝倉氏遺跡博物館蔵)



土塁と評価されている（岩田一九八〇）。城内では最も大きな土塁だが、南側の堀切と離れすぎているため、城郭遺構とみること疑問を呈する論者もいる（佐伯 二〇二〇）。

そこで過去の調査成果を見直すと、曲輪Ⅲの形状が近年に変更されたことが判明した。図3は、昭和五四年に福井県立朝倉氏遺跡研究所（福井県立一乗谷朝倉氏遺跡博物館の前身）が作成した測量図である。ここで

は、現在の土塁の南下に谷状の窪みがあり、そのさらに南側に土塁状の高まりがみられる。この窪みが城郭の堀なのか、自然の地形なのかは即断しかねるが、少なくとも土塁の南側が現在のようなフラットな地形でなかったことは確かである。仮に堀とみれば、現存する堀切とともに二重の防御ラインを構築していたことになり、土塁と堀切の隔たりは現状ほど大きくはなかったことになる。

図3でもう一つ注目されるのは、外側の堀切が土橋を伴わず、尾根筋を完全に遮断している点である。現在は図2にみるように、堀切の東端を園路が南北に横断する格好となっているが、これは昭和五〇年代以降の造作であることが判明する。したがって、この堀切が実質的に城域の南を画する防御ラインであったと評価できる。



写真5 曲輪Ⅱの土塁

曲輪Ⅳは、曲輪Ⅰから標高にして二〇メートルほど下ったところにある。曲輪面の造成は丁寧で、曲輪Ⅰ～Ⅲに比べて残りがよい。太ふりの石材がいくつみられるが、恐らく曲輪Ⅰとその周辺に施されていた石垣の石材であろう。曲輪Ⅳの北東には小規模な削平地が多数みられるが、後世に植林の手が入っており、城の遺構か判断しかねる。

現在、曲輪ⅠとⅣは車道で分断されているが、間の尾根筋に曲輪が築かれていた痕跡はみられず、もともと曲輪の配置は散在的だったのだろう。曲輪Ⅳの西側の切岸は傾斜が大きく、高さもあり

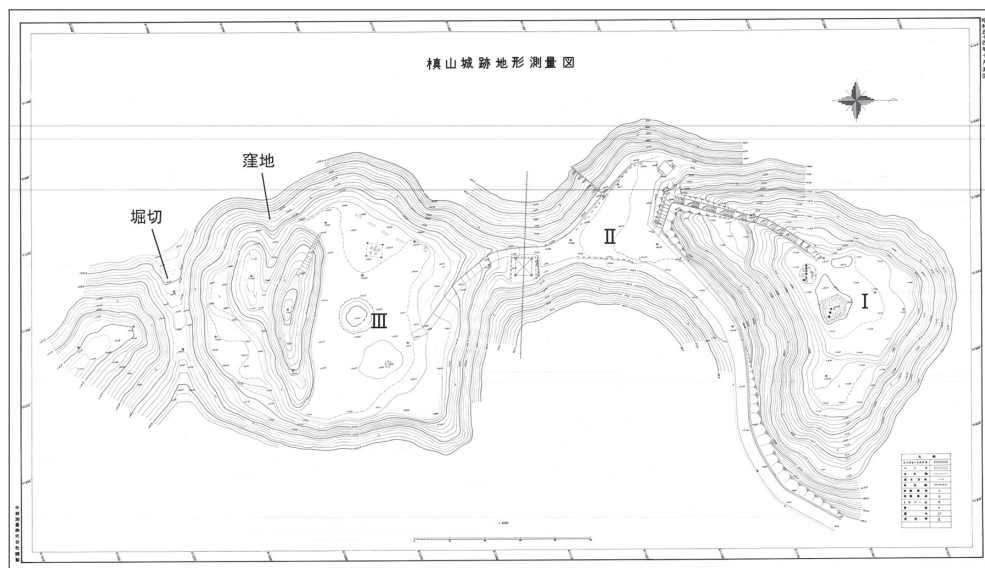


図3 東郷横山城跡測量図（福井県立一乗谷朝倉氏遺跡博物館蔵、一部加筆）

(写真6)、曲輪Ⅰとは隔絶した印象を受ける。曲輪Ⅵも、曲輪Ⅰからは直線距離で九〇メートルほど離れている。こうした曲輪の散在性は、当城の特徴の一つといえよう。

とはいえ、曲輪間のアクセスは何らかの形で確保されていたと考えられる。曲輪Ⅰから東方に下るスロープがあり、その真下に帯曲輪が開口する箇所がみられる。この開口部の下には、石垣の石材がいくつか確認でき、重要な施設であった可能性がある。そうすると、この一連の遺構は、曲輪Ⅳ方面からの動線をあらわしているのではない。曲輪Ⅳの北側にも同様の開口部がみられ、ここから後述する大手筋へと続く山道が延びている。したがって、これらの開口部は虎口の遺構とも捉えられる。ただし、現状の山道は近代以降の植林にも利用されており、後世の改変を受けていることは注意しなければならない。

曲輪Ⅴは標高約八三メートル地点に位置し、西・北東・北西の尾根筋に曲輪群を配する。特に南西の曲輪群は規模が大きく(写真7)、建物があった可能性が考えられる。北西の尾根筋に小規模な堀切がみられるものの、防御の中心は曲輪Ⅳと同様に切岸である。

曲輪Ⅴの南西の谷筋にも削平地がみられるが、植林に伴う段築であると判断



写真6 曲輪Ⅳ西側の切岸

し、図化しなかった。ただし、三社神社裏手の曲輪Ⅶはまとまった面積をもち、山上の曲輪群との位置関係から居館などの施設も想定できるため、城郭の遺構と判断した。三社神社の方面から登る山道が、大手道にあたりと考えられている。この道は、曲輪Ⅳ・Ⅴ間の鞍部の直前で屈曲している。このクランクを城郭の枳形とする見解もあるが(岩田 一九八〇)、近代以降の林道にはこうした形状は珍しくなく、城郭の遺構とは考えにくい。

### 3 遺構の評価

東郷槇山城においては、曲輪Ⅰが最も標高が高く、主郭に相当するとみられる。しかし、面積はそれほど大きくなく、城内で卓越した位置にあるとはいえない。曲輪Ⅱなど、他の曲輪群に居住や駐屯のスペースを分散させた様子が見えてくる。

曲輪Ⅰ～Ⅲは一続きであり、一連の曲輪群と捉えられる。曲輪Ⅳも、動線の存在から曲輪Ⅰとのつながりをみることができ。曲輪Ⅵも、曲輪Ⅰから派生する尾根筋上に位置しており、一体のものと評価できる。このように、曲輪Ⅰの三方に曲輪群が展開しているが、曲輪Ⅳ・Ⅵとの間の尾根筋には曲輪が設け



写真7 曲輪Ⅴ南西の曲輪



られず、全体に散漫な印象である。これは、もともと地形の起伏が少ない箇所に曲輪を造成したためであろう。地形を活かして、少ない土木量で曲輪をより多く、広くとる工夫といえるが、その結果、曲輪間の連絡が希薄になった面は否めない。

この他、曲輪Ⅴを中心とする曲輪群もまとまった面積をもち、居住や駐屯に対応できるエリアとなっている。佐伯は、この部分が曲輪Ⅰからは独立した位置にあり、在地国人の縄張を示していると評価している（佐伯 二〇二〇）。佐伯がいうように、当城は少なくとも曲輪Ⅰ・Ⅴという二つの核をもち、広大な城域を誇っていたとみることができる。

この部分が、近世に城跡とみなされていかは定かでない。前章でみたように、地誌にみえる曲輪名は、曲輪Ⅰとその周辺に比定されている。「屋形跡」は所在不明だが、面積からすると曲輪Ⅳを指す可能性が考えられる。いずれにせよ、曲輪Ⅴには具体的な名称は与えられず、それほど重要視されなかったのだろう。

当城が、切岸を防御の中心に据えていることは先述した。土塁や堀切は曲輪Ⅲや曲輪Ⅳの周辺に限られ、他に顕著な防御施設はみられない。これに対して、朝倉氏の本城である一乗谷城では、多種多様な空堀が効果的に配置されている（新谷 二〇二二）。特に、畝状空堀群は朝倉氏特有の築城技法として評価されており、国内外の関連城郭にみられる。畝状空堀群の年代観は論者により異なるが、天文・永禄期（一五三二～一五七〇）とする佐伯の見解（佐伯 二〇二〇・二〇二二）に耳を傾けると、朝倉氏の築城技術が本格的に発達するのは一六世紀中頃以降と考えられる。当城の基本プランは、それよりも古い様相を示していると評価できる。

当城で最も規模の大きい土塁と堀切が、曲輪Ⅱの南方に配置されている。こ

れは、南側の尾根筋からの侵入を遮断する施設と捉えられる。尾根筋を堀切などで遮断することは、尾根の先端付近に城を築く際の定石といえる。ただし、当城の場合、この尾根筋は一乗谷の西側を画する山地に続くことから、堀切の構築が一乗谷との関係においてどのような意味をもつのかを考える必要がある。

一乗谷の西側の山地には、堀切などの小規模な城郭遺構が点在している（図1）。大系は、尾根続きの御茸山までに四ヶ所の堀切がみられることから、当城が一乗谷と緊密に連携していたと評価している（岩田 一九八〇）。しかし、尾根続きに堀切が連続して配置されているのだから、連携ではなく、むしろ分断されているとみるべきだろう。

なお、佐伯はこれらを「一乗谷川左岸丘陵遺構群」と概括した上で、遺構群のまとまりがないことから、統一した指示を欠いた状態で急遽構築されたとし、朝倉氏滅亡直前の遺構と評価した（佐伯 二〇二〇）。しかし、こうした遺構は研究史上阻塞とされてきたもので、中世前期から戦国・織豊期に至るまで長期にわたり確認できる（村田 一九八四）。一連の遺構には、尾根伝いの侵攻を妨げる役割が想定され、その構築時期や目的については、一乗谷の都市形成の過程と絡めて論じる必要がある。

以上のように、曲輪Ⅱ南部の土塁と堀切は、一乗谷方面へのアクセスを遮断する遺構と捉えられる。このことは、当城が一乗谷の近くにありながら、半ば独立的な立場にあったことを物語っている。規模の大きさからしても、朝倉氏の一門ないし家臣の居城とみるのが妥当ではないだろうか。一乗谷城の支城としての側面がこれまで重視されてきたが、現存する遺構からは、両者の一体性や共同での防衛体制を見出すことは困難である。

当城の曲輪配置は自然の地形に大きく制約されており、防御の中心は切岸で

ある。これは、本城である一乗谷城よりも古い様相を示している。したがって、一乗谷城が本格的に整備されたとみられる一六世紀中頃から朝倉氏の滅亡までは、当城では大がかりな普請は行われなかったことになろう。その間、当城は使われなかったかもしれないし、古い縄張のまま維持されたのかもしれない。いずれにせよ、一乗谷城の改修に伴う本拠域の防衛体制の整備は、当城には及ばなかったのである。

残存する石垣の遺構や石瓦の散布状況から、曲輪Ⅰとその周辺が豊臣期に改修されたことは衆目の一致するところである。一般に、織豊政権下の築城では、主郭を中心とした求心性の強化が志向される(千田 二〇〇〇)。そのため、戦国期の城郭を織豊期に改修する際には、中心部に石垣や櫓形虎口などを設けて城域の集約化を図ることが多い。当城の改修も、同様の文脈で捉えることができる。

城域の集約化には、防御のポイントを定め、曲輪間の主従の関係を明確化するメリットがある。その反面、実質的な城域はどうしても狭くなってしまふ。曲輪Ⅴを中心としたエリアは朝倉氏段階の姿を残していると従前からいわれていたが(岩田 一九八〇)、それはこうした取捨選択の結果である。先述の通り、当城では曲輪間の隔たりが大きく、相互の連絡が希薄になりがちであった。長谷川秀一は、そうした既存の曲輪配置を大きく変えることなく、中心部に石垣や瓦葺きの建物を設けて部分的に改修を加えたのである。

そうすると、現状の曲輪配置は概ね戦国期のものを踏襲しているといえよう。曲輪Ⅰ～Ⅲでは後世の改変が著しく、長谷川段階の普請の様相を捉えにくいところがある。とはいえ、その範囲は限定的であり、既存の縄張プランを大きく変えるものではなかったとみられる。

## おわりに

東郷槇山城は、戦国大名朝倉氏の支城としての歴史と、豊臣期の地域拠点としての歴史の二つの歴史を有する。両者の間には一定の断絶が想定されるものの、これだけ息長く存続が確認できる山城は珍しい。越前国において、戦国期から織豊期への展開を考える上で貴重な遺跡といえよう。

当城は、もとの地形に合わせて曲輪を造成したため、曲輪間の連絡が希薄である。このようなプランを豊臣期に採用するとは考えにくい。そのため、現状の曲輪配置は戦国期のものを踏襲しているとみてよい。さらに、切岸中心の防御態勢からは、一六世紀中頃以降に本格的に整備されたとみられる一乗谷城よりも古い様相を留めていると判断できる。一般に山城跡の地表面観察では、最終段階の様相が対象とされる。しかし、当城では長谷川氏による改修が主郭周辺に限られたため、曲輪Ⅴなどを中心として、全体に戦国期の様相を色濃く残す結果となった。その意味では、当城は、山城の防御施設が著しく発達を遂げる一六世紀中頃より前の特徴を示しており、越前国における築城の歴史を探る一つの指標になると考える。

当城は、一乗谷を画する山地の尾根続きに位置し、朝倉氏の本拠域を構成する重要な要素の一つと捉えられる。ところが、一乗谷城とは築城・改修のタイミングが異なり、構造上も一乗谷からの独立性が看取される。「朝倉孝景条々」一四条は、家臣団の城下町集住を義務づけた先進的な政策としてよく知られているが、実際には谷の周辺に数多くの城館跡が伝わっている(図1)。この矛盾の意味を考える際、当城の事例は一つの示唆を与えてくれるのではないだろうか。すなわち、当城のような拠点クラスの城郭が本拠域に存在することは、朝倉氏権力内での一門や家臣の自立性の高さを物語っていると考えられる。朝倉氏は、領内での築城の規制を理念としては掲げながら、こうした自立的な存



在を容認せざるをえなかったのだろう。

豊臣期に城主をつとめた長谷川家については、黒田基樹や谷徹也の研究により、秀一死後の家督継承の様相が実証的に解明されつつある（黒田 二〇一六・谷 二〇一七）。秀一の親族については、近世の地誌にも断片的に叙述がみられ、編者は何らかの情報源をもっていたとみられる。ところが、近代の郡誌編纂ではそうした要素は汲み取られず、結果として長谷川秀一存在のみが大きくクロースアップされる形となった。

秀一の城というイメージを定着させるきっかけになったのが、大正期における顕彰碑の建立であろう。これは戦病死者の忠魂碑設置と二連の事業であり、当該期におけるナショナリズムの高揚を反映したものであった。顕彰碑の存在が城跡の認知度を高め、地域住民の愛着や親しみにつながったことは確かである。その一方で、当城跡の歴史を秀一に収斂させて捉える傾向を強めたことも否定できない。また、顕彰碑の建立以降、公園や道路の整備に伴い、中心域の遺構の破壊が進んだ。廃城後の歴史のなかで、大正期は城跡の景観や城跡への人々の眼差しを変えていく転機になったといえよう。

〔付記〕 本稿のベースとなる報告は、二〇二二年三月五日の東郷公民館講演会（オンライン開催）にて行なった。講演会の実施および事前の現地踏査では、小川勇治氏（東郷公民館館長）のご高配を賜った。また、成稿にあたり、石川美咲氏（福井県立一乗谷朝倉氏遺跡博物館）・佐藤圭氏（元福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館）・白嶋祐二氏（福井市立郷土歴史博物館）・谷徹也氏（立命館大学）・橋本紘希氏（福井県立歴史博物館）より指導・助言を得た。記してお礼申し上げる。なお、本稿はJSPS科研費JP22K13209の交付を受けた研究成果の一部でもある。

## 参考文献

- 石川美咲 二〇二二「東郷横山城」山口充・佐伯哲也編『北陸の名城を歩く』吉川弘文館
- 市川秀和 一九九九「足羽山公園の成立と場所の政治学——福井市における近代公共空間の形成に関する一考察——」『日本海地域の自然と環境』六 福井大学地域環境研究教育センター
- 岩田隆 一九八〇「東郷横山城」『日本城郭大系 第二一卷 京都・滋賀・福井』新人物往来社
- 北野隆亮 二〇二二「紀伊における石の土木史——発掘調査で検出された石組遺構の検討——」『中世・近世における石のまちづくり 調査研究報告書』福井・勝山日本遺産活用推進協議会・奈良文化財研究所
- 黒田基樹 二〇一六『羽柴を名乗った人々』KADOKAWA
- 小島道裕 二〇〇五『戦国・織豊期の都市と地域』青史出版
- 佐伯哲也 二〇二〇『越前中世城郭図面集』Ⅱ 桂書房
- 佐伯哲也 二〇二二『朝倉氏の城郭と合戦』戎光祥出版
- 新谷和之 二〇一九「越前国一乗谷周辺での山林利用——中世城郭廃絶後の土地利用をめぐる——」『民俗文化』三二
- 新谷和之 二〇二〇「越前国における明智光秀伝承の創出——東大味館（明智館）を事例に——」『民俗文化』三二
- 新谷和之 二〇二二「一乗谷城の縄張構造」『一乗谷朝倉遺跡資料館紀要 二〇一九』
- 杉原丈夫・松原信之編 一九七一『越前若狭地誌叢書 上』松見文庫
- 千田嘉博 二〇〇〇『織豊系城郭の形成』東京大学出版会
- 高木博志 一九九九「桜とナショナリズム——日清戦争以後のソメイヨシノの植

- 樹― 西川長夫・渡辺公三編『世紀転換期の国際秩序と国民文化の形成』柏書房
- 谷徹也 二〇一七「書評…黒田基樹『羽柴を名乗った人々』『ヒストリア』二六三
- 谷徹也 二〇二二「朝鮮三奉行」の渡海をめぐる『立命館文学』六七七
- 野中勝利 二〇一五「岩手県による岩手公園の整備と維持管理における長岡安平による公園設計の受容性」『都市計画論文集』五一
- 羽賀祥二 一九九八『史蹟論―一九世紀日本の地域社会と歴史意識―』名古屋大学出版会
- 福井市 一九九〇『福井市史 資料編1 考古』
- 福井市 二〇〇四『福井市史 通史編3 近現代』
- 福井県教育委員会 一九八七『福井県の中・近世城館跡』
- 藤井譲治 一九九四「豊臣期における越前・若狭の領主」『福井県史研究』一二
- 藤田達生 二〇二二『天下統一論』塙書房
- 松原信之 二〇〇八『越前朝倉氏の研究』吉川弘文館
- 松原信之 二〇一七『朝倉氏と戦国村一乗谷』吉川弘文館（初版一九七八）
- 松原信之 二〇二二「豊臣政権と越前の長谷川秀一（東郷侍従）について」『福井県地域史研究』一三
- 村田修三 一九八四「中世の城館」永原慶二・山口啓二編『講座・日本技術の社会史 第六巻 土木』日本評論社